令和元年１１月１０日

愛知県上海産業情報センター
林　　秀　幸

一般調査報告書
焼き物のまち江蘇省宜興市について

2019年10月17日、愛知県常滑市と江蘇省宜興市が友好交流都市提携を締結しました。常滑市は常滑焼で知られる日本六古窯（越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前）の１つを擁する焼き物の一大産地ですが、宜興市もまた、中国有数の焼き物の産地として古くから知られる地域です。

今回は、中国の「陶都」と呼ばれる江蘇省宜興市についてご紹介いたします。

宜興市の概要

宜興市は上海から西に約150キロ、車で約3時間半の距離に位置する人口130万人の都市です。江蘇省の無錫市の中にあり、中国の行政区分における省→市→県の順の区分では「県級市」に当たります。

市の面積は約1,996㎢で、常滑市の面積約56㎢の約35倍、人口は常滑市の5.5万人の約24倍となり、中国の都市の規模感の大きさに圧倒されます。

宜興は古くから紫砂と呼ばれる陶土を産出し、この土を用いた窯業が発達してきました。紫砂を使った急須や盆栽鉢が特に有名で、陶磁器産業に関わる事業者数（宜興市陶磁行業協会員数）は約10,000事業所と言われており、これが「陶都」と言われる一つの由縁です。

また、宜興には竹海とよばれる広大な竹林や、宜興紅茶として有名なお茶の産地があり、豊かな自然に恵まれた地域でもあります。

宜興特産「紫砂壺」

宜興と常滑のつながり

宜興市と常滑市は、ともに有名な焼き物の産地ですが、両市には歴史的に古いつながりがありました。常滑では江戸時代末期には既に急須が生産され、現代でも生産されている朱泥急須も作られていたようですが、1878年（明治11年）、常滑焼の陶祖と呼ばれる鯉江方寿（伊三郎1821～1901年）が急須作りの技法を高めるため、宜興から金士恒（きんしこう）を招き成形技法を学んだとされています。常滑焼はこの技術伝承を機に朱泥急須の一大産地となりました。

明治時代に始まったこの技術交流により常滑焼きは発展しましたが、宜興市との交流は長らく途絶えていたようです。近年になり、陶磁器製品の国内需要が落ち込む中、海外での販路開拓を進めていくうちに宜興と常滑の焼き物業界関係者が互いに交流をもつようになりました。その後、中国と日本とを行き来する中国人実業家の仲介により2014年（平成26年）頃から業界レベルでの交流が始まり、2017年には、宜興市長と常滑市長が両市の焼き物業界の交流を支援していくという行政間の合意にまで発展しました。

友好交流都市締結式

宜興市内で行われた常滑焼展

今回、両市はこの焼き物を通じた交流をきっかけに、今後は焼き物だけに限ることなく、経済・産業・観光など幅広い分野においても交流を深めていきたいとの思いを相互に確認しました。

愛知県と江蘇省は、1980年に友好提携を締結して以来、来年（2020年）には40周年を迎えますが、2009年の豊川市と無錫市新区との友好提携以降、江蘇省内での新たな友好提携はありませんでした。今回この時期に新たな友好交流が生まれることは、愛知県と江蘇省の双方にとっても、非常に有意義な出来事ではないかと思います。

（参考）中国における愛知県内市町村の友好提携状況

市町村	提携先	提携年月日
名古屋市	江蘇省南京市	1978.12.21
犬山市	湖北省襄樊（じょうはん）市	1983.3.13
豊橋市	江蘇省南通市	1987.5.26
岡崎市	内蒙古自治区呼和浩特（フフホト）市	1987.8.10
稲沢市	内蒙古自治区赤峰市	1988.5.16
田原市 （旧赤羽根町）	江蘇省昆山市	1993.5.14
半田市	江蘇省徐州市	1993.5.27
瀬戸市	江西省景徳鎮市	1996.10.11
豊川市	江蘇省無錫市新区	2009.4.15

上海産業情報センターでは、今後も中国の現地情報を提供して参ります。

本資料は、参考資料として情報提供を目的に作成したものです。
上海産業情報センターは資料作成にはできる限り正確に記載するよう努力していますが、その正確性を保証するものではありません。本情報の採否は読者の判断で行ってください。
また、万一不利益を被る事態が生じましても当センター及び愛知県等は責任を負うことができませんのでご了承ください。